

イエス―「空気」を切り裂く男

(ヨハネ五・一六―三〇)

二〇〇七年、日本中を席卷した「KY（空気読め）」は今や死語ランキング一位だとか。だが「場の空気」と言う概念自体はKYが登場するひと昔前から注目されていた。山本七平はその著書『空気の研究』において日本の現代史は常に「その場の空気」という超論理的怪物に支配されてきたということを実例をもって主張するのだが、その一つが戦艦大和の水上特攻である。制空権は奪われ、航空機もない、丸腰の突撃は誰の目にも愚挙だった。にもかかわらず作戦は実行され、大和は沈んだ。なぜか。「それを止める空気ではなかったから」である。場の空気、それは確かに怪物である。翻って今朝のテキストがもつ空気は重い。無理もない。自らを殺そうとしている者に囲まれているのだから。しかしイエスは臆せず自らと父の間にある密接な関係について語り続ける。イエスの言葉から三つのことを学びたい。

一、御父は御子を愛する

一九節においてイエスはご自身の成すことは即ち父のなさることであると述べた上で、その理由が御父が御子を愛して、ご自身のなさることを御子に示したからだと言っている。確かに愛することと自己開示の間には明確な関係性がある。愛し合つて結婚したと主張する夫婦の間に全く自己開示がなかったとするなら、その愛にはやはり疑問符がつく。もちろん何でもかんでも言っているというものではないだろうが、自分がどう嬉しいのか、何が幸せなのか、何を考えているのかを相手に一切伝えようとしないのでは愛の深まりなど望むべくもない。御父と御子の関係はそれとは対照的だ。更に御父の御子への愛は權威の移譲ということにも表されている（二七節）。御父は御子にさばきの権限を与えているが、これも信頼と愛なしにはできないことだ。一体この世のどこに信頼していい人にお金や權威を任せる人がいるだろう。また愛してもいい人にかけてえの無いものを与える人がいるだろうか。そう考えると確かに御父は御子を愛していることがよくわかる。

二、御子は御父に従う

では御子はどのように御父の愛に応えているのだろうか。一九節において、御子はご自身の行いが御父の思いを離れてなき

れることはないと言っている。また三〇節においては御子は常に自分の望むことではなく、自らを遣わした父の御心を求めると語っている。つまり積極的、消極的の両面において御子が御父の意志に従っていることをこれらの箇所は教えている。しかしここで誤解してはいけないのは、これは隷属ではないということだ。イエスの御父への服従はむしろ愛に基礎づけられた意志的なものであった。ゲッセマネの祈りを思い出してみよう。確かに最初イエスは「この杯を取り除けてください」と素直に祈った。しかしその後「私の願いはなく、みこころのままに」と祈り従ったではないか。御父は御子を信頼し、權威を与えられたが、御子は同じ愛をもって御父を信頼し、服従したのだ。

三、御父と御子は命を与える

このように御父と御子は永遠の愛の関係で結ばれているのだが、それで終わってしまえば私たちは「圏外」だ。しかし大丈夫だ。私たちは圏外に追い出されることはない。それどころか御父と御子の愛は御子の派遣によって私たちにも及ぶのである。それがいのち、神のさばきを超える永遠のいのちなのだ。三位一体の神の間を流れる自己開示と授与、そして信仰と従順によってあらわされる愛がイエスによつ

て伝えられ、また十字架と復活によつて実現したとき、それを信じるものはみな生きる。これが福音である。これこそイエスが語りたかったことである。だからイエスはユダヤ人たちが発する重苦しい空気を一切読まず、むしろそれを切り裂いて福音を語ったのだ。

* * *

松山大耕さん。今が「旬」の宗教者の一人である。一昨年の九月にTEDカンファレンスで語ったスピーチは彼の名声を不動のものにした。その核心的趣旨は「日本人の宗教観とは畢竟『何を信じるか』ではなく『他者を尊重するか』であり、この寛容性のある宗教観を世界にシエラすること多くの紛争を解決する鍵になる」というものである。成る程わかりやすいしつくりくる。見事に「場の空気」に馴染んでいる。しかし今朝の箇所のイエスの姿を思い起こすとき、平和や道徳の向上のため、他の宗教の方と一緒に行動することはあっても、神の御子イエスを偉大な宗教家と同じ列に引き下げることはできない。たとえ頑迷な根本主義者とのしられても、だ。なぜか。それはわが主にしてわが師がそうだからである。時代や場の空気ではなく、どこまでもキリストに信従する。それがキリスト者である。